



## 医療法人 ひのでクリニック

在宅医療専門の診療所として、平成16年に福岡市南区で  
開業された「医療法人ひのでクリニック」院長の  
中村幸泰先生(49歳)にお話を伺った

〈院長〉中村 幸泰先生

◎取材日：2010年7月



### 4代続くドクターの家系 医者になれないと思った学生時代

「元々中村家というのは、京都伏見の造り酒屋でしたが、幕末に幕府を応援したために家を潰されてしまいました。そんな状態だったので曾祖父は軍医になり、祖父は産業医になってアジア地域を転々とし、その後帰国して小児科医になりました。まだ保険制度がなかった時代、父は祖父がやっている小児科が経済的に厳しいのを見て、早く自立できる産婦人科医になりました。そんな家系なのですが、私も小さい頃から『医者になれ』と言われてきたのですが、全くその気がなかったですね。」と中村幸泰先生は語りだした。

「私は、小さい頃大工さんや水族館の館長になると言っ親を困らせていました。高校に進学したらバイクに夢中になり、随分やんちゃをやりました。当時、自分は医者にはなれないと思っていました。しかし高3になり、将来何になるかと考えた時、結局医者しかないなあと思い医学部入学を目指しました。そんな私ですから、たっぷりと浪人をした後、久留米大学医学部へ入学を許されました。決して高邁な理想があって医者になったものではありません。」

### 医学部入学 ラグビー人生の始まり

「高校・浪人中と全く運動をしたことがなかった私はせっかく神様がくれた医学部入学という人生の転機で何かスポーツをしようと考えました。入学して間もなく、グラウンドに足を運んだ時、私の背後から『ゆきやす〜何しよん?』と懐かしい声がありました。そこに立っていたのは汚いラグビージャージを纏い、楕円形のボールを抱えた予

備校時代の先輩でした。『先輩、お久しぶりです!』と答えた私に向かって『そげなところで、ぼ〜っと見ようぐらいなら、ジャージ貸すけんグラウンドでも走ってみんね?』と先輩の優しい声。私は『はい、わかりました。ありがとう!』と軽く返事をしてしまいました。これが先輩の仕掛けた罠だと気づくのに、そんなに時間はかかりませんでした。

私は久しぶりに身体を動かす心地よさに酔いしれながら、2~3周グラウンドを走った後、10人ほどのラグビー部の先輩に囲まれました。そして『今年も勇気ある新人が我が栄光のラグビー部に入ってくれた。さあ、拍手で歓迎しよう。』という先輩達の輪の中で私は、『な…中村幸泰と申します。宜しくお願い致します。』と叫んでいました。『しまった、なんという過ちを冒してしまったんだろう…。』その日自宅に帰る電車の中で、つくづく自分の軽薄さに落胆しました。これが今に至る30年近いラグビー人生の始まりでした。反面『たかが医学部の運動部ではないか。そんなにキツイ事はない。』と慰める自分もありました。しかし久留米大学医学部ラグビー部は、戦前早稲田大と対戦した事もある名門でした。因みに今年は、九州山口の医学生大会三連覇、西日本大会でも優勝しています。」

「そんなラグビー部に入ってからというもの、毎日地獄のように走り回っていました。何の経験もない私は練習が終わる頃にはいつも軽い脳震盪状態でした。この蟻地獄から逃げ出そうと考えたのは、1度や2度ではありません。しかし、こんな私でもずっと続けていくうちにラグビーが好きになって、気がついたらキャプテンにさせられていました。最初は嫌々始めたラグビーでしたが、辞めずに6年間続けられたことが、今となっては私の人生の宝となっています。医師国家試験受験前の苦しい時や、外科に入局して夜も眠れない辛い時でも、ラグビー部の夏合宿と比較したら、たいしたことない、と乗り越えることが出来ました。はっきり言ってラグビーをしていなかったら、ズン

ダレ(だらしがない)の私は間違いなく医者にはなれていなかったと思います。」

### 外科医をめざす 憧れの「山笠」に参加

「私が外科医を目指したのは、単純な理由です。ラグビー部の先輩達が外科を専攻したこともあります。外科ならば勉強しないと手術させてもらえないと考え、自分を追い込む為でした。」

「そんな私でしたが、同学年で最初に米国留学することになりました。当然、成績の良い同学年の友人達は愕然としていました。私の場合、留学よりも、留年と思う友人たちが多かったの(笑)」

「米国に留学して一番驚いたのは、研修医制度の違いでした。当時、米国では5年間同じ施設で研修医として勤められるのは、5人に1人でした。研修医は2年経つと、5人のうち1人辞めさせられる。辞めさせられた研修医は、3年目から受け入れてくれる施設を全米から探さなければならぬ。そういった厳しい研修医期間を乗り越えれば、6年目は日本で言う認定医・専門医として認められ、給料が5倍くらいになる。そんな米国の医師の給与体系にびっくりしました。日本では、私が医者になって9年目の時、床屋の主人から『もう先生は1000万円くらい給料をもらっているんでしょ?』と問われ『無給ですよ』と答えて笑われたのを今でも覚えています(笑)。短い米国留学でしたが、手術内容そのものは、日本の方が勉強になると思いました。」

中村先生が入局10年目を迎えた頃、小さい頃から憧れていた「山笠」に初参加されたという。「山笠があるけん博多たい」と言われるように、7月1日~15日に行われる博多祇園山笠は750年以上も続く櫛田神社の伝統的奉納神事である。

「『山笠には運動不足の太った中年のおじさんやモヤシみたいな若者が参加しているのだから、普段から鍛えて



ひのでクリニック スタッフの皆様

いる自分は楽勝だ』と高をくくって参加しました。しかし初めて出たラグビーの試合よりきついことを、思い知らされました。その後「山笠」には毎年参加していますが、何回参加しても「追い山」が終わった時の何ものにも代え難い爽快感を味わっています。6月になって博多の街中を長法被・ステテコ・雪駄姿のオイシャン達がうろうろし始めるとソワソワドキドキしてきます。」

### 突然の決意 過疎地域で勤務医

「私は平成12年1月から平成15年3月までの3年3ヶ月、北海道の遠別町という僻地で外科医として働きました。そこは、福岡市の倍の面積に3500人の住民しか住んでいない過疎地域でした。今思えばこの過疎地での診療経験が、現在の在宅医療専門として診療する上で非常に役立っています。『何故そんなところへ行ったのか?』とよく尋ねられるのですが、崇高な思いがあったわけではありません。北海道に住んでいる先輩からの(雪に囲まれた写真付きで送られてくる年賀状)を羨ましいと思ったことあったのですが、ある日アスファルトに囲まれた環境で育つ息子を見て、人間も自然の一部ということを学ばせなければならぬと考えたからです。」

「北海道地域医療振興財団に応募し、遠別町立国保病院へ勤務することになりました。国保病院といっても、私も含めて医師2人です。私のとった行動は、スペシャリストとして医業を貫こうと考えている大半の医師にしてみれば、異様に思えるかもしれませんが、一度しかない人生、せっかく「まぐれ」で貰った医師免許があるのだから、それを活かして色々な体験をしてみたい、というのが私の心情です。」

北海道に移って最初の半年は、『博多に帰りたい』と懇願する家族をなだめすかすのに必死でした。そんな家族も日が経つとだんだん北海道の大自然に魅了され、冬がやってくると目の色を変え、スキーや犬ぞりに夢中になる子供達を見て安心しました。今思えば、子供たちに思いっきり大自然に浸ることのできる貴重な体験をさせることができた大変嬉しく思っています。」

「この遠別町における、水虫から心筋梗塞まで診ざるを得なかった3年3ヶ月の経験は私の財産となり、家族にとって遠別町はかけがえの無い第2の故郷となっています。」

## 在宅医療専門医 武富先生との出会い そして開業

「北海道から福岡へ帰ってきた私は、地元の内科系病院で勤務しました。その病院では往診も担当していました。往診に行った時は、患者さんの家族から感謝されるのが本当に嬉しかったですね。そんなある時、膵臓がんの末期の患者さんを担当することになりました。

その患者さんは、毎日点滴をしなければならなかったのですが、私は外来・病棟・検査も担当していましたので、毎日往診に行くことができません。『困ったなあ』と思っていた時、看護師が『それなら在宅医療専門でやっている武富先生にお願いしたら…』と言ってきました。『え、こんな近くに在宅医療専門でやっているドクターがいるの?』と言った私は、すぐに武富先生に電話で往診を依頼しました。武富先生は、すぐに快諾されました。」



往診車内の様子

「当時、在宅医療専門での開業に興味を持っていた私は、武富先生に往診を依頼すると同時に、『どんな診療をされているのですか?先生のやっていることをいろいろ教えて下さい!』とお願いし、すぐに『たけとみクリニック』へ向かいました。武富先生は、私の質問に対して率直に丁寧に答えて下さり、在宅医療のノウハウを徹底して教えて頂きました。この出会いに本当に感謝しております。

その後半年間準備をして、平成16年、亡父が以前産婦人科を開業していた福岡市南区のボロボロになった診療所で、在宅医療専門として開業しました。ダメだったらまた勤務医に戻ろう、と思っていたので、不安はありませんでした。開業後は、お蔭様で患者さんは順調に増え、開業して2年経った頃、これならやれると確信しましたので、思い切って古い診療所を改装しました。」

中村先生は、開業された最初の1年は、家族と別居して現在の診療所に住んで診療を行っていた。その頃は、看護師1人、事務1人だったという。ドクター1人だけで24時間対応していたので、最初の3年間は全く休まなかったそう。だ。「在宅医療専門で開業するにあたって大切なことはどんな点ですか」と質問すると「在宅医療をやる上

で、病診連携が一番大切です。入院を受け入れてくれる施設との連携が出来ていないのに、単に保険点数が高いからという理由で在宅医療をやるというのであれば、大変なことになると思います。

私は、患者さんが病院に入院される時には、可能な限り付き添うようにしていますので、この7年間で何十回救急車に同乗したかわかりません。」

中村先生にスタッフ指導について尋ねると「私は人様を指導できるような人格者じゃないですよ。うちの、私以外のスタッフで保っています。」と謙遜された。その後「取って言えば、在宅では意志の疎通ができない患者さんも多い為、スタッフには、ご家族から『患者さんはどこで生まれたのか、若い頃なにをやっていたのか?』を聞いて、患者さんに思いを入れて接するように、と指導しています。私は、診療を“やっつけ仕事”にだけはしたくないと思っています。今では『あの患者さんはこんな人だったんですよ。』とスタッフが言うようになったのが嬉しいです。」と笑顔で答えられた。

「開業当初から、診療以外の経営面は全て妻(院長夫人)に任せています。私と一緒に診療を担っている小藤先生やスタッフは、一生懸命頑張ってくれています。大変感謝しています。将来、沖縄にでもサテライト診療所を持って、ドクターやスタッフが福岡と沖縄を行ったり来たりできるといいなあ、等と時々夢想したりもします。」最後に、私たちITIの担当者に対して「休日でも夜間も関係なく駆けつけてくれるので、大変満足しています」とねぎらいの言葉をかけて頂いた。



ひのでクリニックスタッフのみなさま(2014年現在)

施設名：医療法人 ひのでクリニック  
場所：福岡市南区大橋3丁目25-32  
URL：<http://www.dr-hinode.com>

ひのでクリニック 中村幸泰先生の備忘録より

# 天国からの感謝状

平成16年春、私は福岡市南区大橋で在宅療養支援診療所を開院し、今年で10年目を迎えた。その間、3台の往診車を乗り継ぎ、積算走行距離は既に20万kmを超えた。

私は開業してから300人近い患者さんを自宅や施設で看取ってきたが、50歳を過ぎた頃より、記憶力が落ちてきたのではないかと日に日に実感するようになった。そういう理由で、印象に残った患者さんのことを備忘録として書き留めておこうと思った。

ある年の4月下旬、当院によく患者さんを紹介してくれるKセンターから電話がかかってきた。紹介医の先生が、直接私と話したい、と言われているので、受話器を受け取り、患者さんの病状を聞いた。

「Kセンター内科のWと申します。そちらのクリニックでは、末期患者の看取りもしていただけるのですか?」とまだ30代前半と思われる若い声の主治医から質問があった。私が患者さんの住所を尋ねると、当院から10分程のところに住んでいることが分り「勿論うちで対応出来ますよ。」と返事をした。

「で、どういった患者さんでしょうか?」私が尋ねると、「34歳の女性なんです。腎臓の術後再発で、全身転移があり、もう化学療法も、放射線治療も出来なくなって、本人が最期は自宅で過ごしたい、と言ってるんですよ。」とかなり深刻なトーンで主治医は病状を話してくれた。

この先生、若いけど、患者さんのことをしっかり思っていてあげることの出来る良い医者だな、と私は感じた。「分かりました。先生も大変ですね。受け持たれている患者さんは沢山おられるんですよね。特に若い方は、治療者としても、気が重くなりますよね。」

私が労をねぎらうつもりで、同情混じりに言ったところ、「実は私の妻なんです…」主治医は、消え入るような声で衝撃的な事実を告げた。

「えっ、…」私は絶句するしかなかった。その日の内にW医師は奥さんの資料を手を、当院へ来て、これまでの細かい診療状況を話してくれた。1年半前に不明熱が続き、いろいろな抗生剤で加療したが、熱は中々引かず、ある日血尿

が認められた。すぐに尿路の精査をしたところ、左の腎臓に進行した癌が見つかった。すぐに腎摘施行したが、再発、化学療法を行ったが、治療効果は薄く、全身の骨、脳、肝臓、肺に多発転移出現、一時は脳転移から意識障害を生じたが、全脳照射で何とか改善し、今であれば自宅に連れて帰れる、と判断されたそうである。「W先生、それならすぐに連れて帰ってあげてください。意識レベルがまたいつ下がるか分かりません。」私が話すと、若い医師は私の顔を見つめ、涙ぐみながら頷いた。

2日後、奥さんが帰宅したとの知らせを受け、早速往診した。そして驚いた。

ご主人から奥さんは沖縄出身と聞いており、肌の色は南方系の浅黒い人を勝手に想像していたが、元々なのか、辛い治療の副作用なのか、患者さんの肌は象牙のように白く、その顔は息を呑むほど美しい。大きな瞳と彫りの深い顔立ち、テレビで見るアイドルなど到底敵わない。

もう立つことは出来ず、私に対して失礼と思われたのか、何とか座位を取っておられるが、それすら辛そうである。「どうぞ、気になさらず横になって下さい。」私が臥床を促すと、「お行儀が悪くて申し訳ございません。」と丁寧に挨拶され、布団に横になられた。

一通り診察した後に気づいたが、お住いはフローリングのマンションなのだが、床一面にスポンジが敷き詰めてある。「何か理由があるのかな?」と少し不思議に思っていたら、「ただいま〜」凄いい勢いでドアが開き、4歳くらいのお母さんにそっくりの、それは可愛い女の子が飛び込んできた。



「あっ、おじさん、コンニチハ」初対面の私を見ても全く物怖じせず、早速スポンジの上で踊り始めた。「おじさん、見て。私、秋の発表会で踊るんだよ。ママ、今病気で寝てるけど、秋までには良くなって、発表会見に来てくれるって言うてるんだ。」

元気いっぱい踊る娘を愛おしそうに見つめる母、その母には秋が来ることがないことを知っている父、私はこの時点で、「これは辛い仕事になる」と覚悟した。初診時は何とか水分も摂れていたし、呼吸状態も保たれていたのも、次回往診は1週間後と告げ、マンションを後にした。帰りの車中を、看護師と私の重い沈黙が支配した。

そして1週間後、再度訪れて驚いた。呼吸状態はとも room airで耐えられるものではなく、殆ど食事も入っていないので、1週間前とは比べようがないほどの“るいそう”（栄養失調）が認められた。

私はすぐに勤務中のW医師に電話した。「何故連絡してくれないんですか、酸素がないと奥さん苦しかったはずですよ。」と私の逆クレームに、ご主人はすまなそうな返事をされたが、訊くと私の手を煩わすまい、と遠慮しておられた様である。

すぐに業者に酸素の濃縮機を持ってこさせ、何とか血中酸素濃度も正常まで戻り、脱水の補正の点滴を施し、その後の連日の往診を約束した。それからは日に日に病状は増悪していく。初診時にすでに骨転移の痛みに対してオピオイド（麻薬）が出されていたが、若いと疼痛が強く、毎日薬を増量していかなければならない。投与方法も、持続皮下注、経口投与、座剤、パッチ（貼用薬）とありとあらゆる方法が必要となる。

看護師である沖縄の妹さんが休みを取って看病に来ておられ、しっかり支えているお陰でもあるが、患者さんは弱音を吐くことなく、相当痛いはずなのにいつも笑顔で迎えて

くれるので、私の方が逆に力を貰う。

2週間が経った。もう殆ど経口摂取は出来ておらず、点滴だけが頼りとなったが、極端な低栄養で、入れた補液は有効に循環せず末梢の浮腫が増すばかりとなってきた。

「もう500mlも受け入れられん様だから、250にしよう。」看護師に告げて、点滴を一日250mlのみに減らした。

それから更に1週間、時折往診時に幼稚園から帰ってきている娘さんと遭遇するが、可愛いその子は母親の完治を疑うことはない。「昨日は絵本を読んでくれるって約束したのに、ママ、また眠たくなつたんだ。つまらないなあ…」傍で聞いているやはり沖縄から駆けつけたおばあちゃんは、堪えきれず隣室に駆け込んで、静かに泣いておられる。本当に辛い。

そして、遂に点滴を落とす血管が確保出来なくなった。大量の麻薬のせいもあり、患者さんの意識はかなり混濁し、「これ以上の侵襲を与えたくない」とご家族も希望されるので、後は口を湿らせる程度の水分だけで過ごしていただくこととなった。

そして、その時が来てしまった。初診から32日目の日曜日の朝7時30分、「先生、家内の呼吸が止まりそうです。」W医師から連絡があり、すぐに駆けつけると、Cheyne-Stokesの下顎呼吸は正に止まる寸前だった。

最期に一度口を開けて大きく吸われた後、呼吸停止、8時5分に死亡を確認させていただいた。

本当に安らかな最期だった。私はご家族に臨終を告げ、隣のテーブルで死亡診断書を書き始めた。娘さんは、動かなくなったママの美しい顔をじっと見つめ、未だ何が起こったか解っていない。ご主人は気丈に振る舞われ、私も出来るだけ平静を保とうとしたが、診断書作成に必要な初回手術の施行日を訊いたときに思わず嗚咽してしまった。

すると、ご主人もこれまで溜めに溜めてきた想いが爆発

し、堰を切ったような号泣が始まった。私はご主人の肩に手を置き、二人は暫く声を上げて泣き濡れた。私は、恥ずかしいほど目を腫らし、患家を後にした。

翌日、私は通夜が始まる前に焼香をさせていただき、クリニックに帰ると、事務を仕切っている家内が真っ赤な目をして私に一通のはがきを差し出した。送り主はM.Wさん、何と看取った本人である。

「前略、失礼いたします。

先生並びにスタッフの方々には

本当にお世話になりました。

なるべく在宅でという願いを叶えてくれて

ありがとうございました。

おかげで幸せな日々を送ることができ、

本当に感謝しています。

皆様の一層の活躍をお祈り申し上げます かしこー」

私は啞然とした。彼女は亡くなる前に死力を尽くして感謝状を認め、自分が召された日に投函するようにご家族に告げていたのである。

今も、このはがきは私の宝物として、いつでも読めるようにオフィスの机の一番目立つところに置いてある。

ITレポート取材中に、“医師と患者さん・その家族との関わり”を象徴する文章を「ひのでクリニック」の中村先生より戴きました。編集部では、現場で活躍される医師の皆様に感謝と尊敬の念を込めて、中村先生に了承頂き、Updated Reportに換えて、この文章を掲載させて頂きます。

